

受け継ぐ日本人のこころとかたち

つなぎく人・物・時間・文化

出雲大社権宮司

千家和比古高校二十一期

## I はじめに

神社は祈りの機能場所であることは申すまでもありませんが、加えて境内の佇まいの風景空間に何かを感じてもらうことも大切なこと。何かを感受する場所空間でもあります。

四十数年前、彫刻家の五十嵐芳三氏が参拝

されました。境内瑞垣外の北東隅に立ち御本殿を仰ぎ琴線を打たれた氏は、以来、つなぎ、生命、誕生、結びなどにテーマを定めて制作に打ち込み今日に至っているとのことでした。その最初の作品は「二人」。この「二」から、日本人の特徴がみえてきます。古来、「ひい・ふう・みい・よお・・・」との数え方があります。これは「×2」で母音変化させ数詞を構成するもので、「×2」、つまり偶数・複数を重視する日本独特の数え方。その完成形の2×5の十よりも未完の八を良しとし、そ

こから十に向かつて無限の「間」をみるもので、日本人の心の営み模様の反映が窺われます。

複数存在間の相対性を認め、その相対存在間の間を重視し、その間をつないでいくこと、結んでいくことを大切にすることを心意です。日本人の心の奥底には、こうした、バロック音楽で言う「通奏低音」が流れています。

## II 出雲大社の、つなぎの場所背景

奈良時代の島根半島部と内陸部側との間の様相は、現在と大きく異なっており、出雲大社の南には『出雲国風土記』で「神門水海」と記載するラグーン(潟湖)が広がっていました。古代にあつて潟湖は天然の良港、日本海沿岸航路の結節点で、舟で人も文物も技術も情報も出入する重要なつなぎ拠点形成していました。

弓浜半島の根元にあつた淀江潟付近から出土の約二千年前の土器の頸部には、秋の収穫祭の風景を思わせる鳥装の祭人や高層建物などの線刻画が描かれていました。神門水海周辺も相似の風景が展開していたことでしょう。

鎌倉時代の絵図を見ますと、真名井の命

ぬしのやしろ

主社の背後に大岩が描かれています。中世には命石社とも。一六六七年の寛文の遷宮造営の時に、この辺り一帯から境内石垣用の石を切り出します。その際にこの大岩も切り出され、下から北陸産の翡翠の勾玉や北九州産の青銅製の戈が出土。約二千年前頃のイワクラ祭祀跡で潟湖をめぐる交流や宗教的文化相の一端を物語り、境内地を含めた一帯が二千年前から聖域的扱いであつたことが知られます。

現在、御本殿後方の八雲山の左右の谷が流れ出る吉野川と素鷲川は、護岸構築により谷から出て真つ直ぐ南流していますが、それは先の寛文造営時の造成以来のこと。古代には谷から谷筋のまま境内中央に向つて流れ、丁度Yの字状に合流、一筋に南流していたことが分かりました。合流地を「川合」と言います。川は神様など異常なエネルギー存在の通り道であり、川合は今様のパワースポット、神と人のつなぎ空間でした。古代人はそうした地をわざわざ選んで神祭りの場としてきたのです。

では、境内地でいつからそのようなことが起つたのか。川合地付近での四世紀後半頃の祭祀関係遺物の出土から、少なくともこれ以来です。ただ、この時から常設の神殿があつ

たかどうか、考古学的には検証できていません。ちなみに、伊勢神宮の境内地から同種の祭祀関係遺物は五世紀に入ってからのもので

す。神殿造営の歴史的な記録記事が文献で確認できるのは、『日本書紀』の斉明天皇の六五九年。ここに出てくる「神の宮」を熊野大社とする理解もありますが、私は出雲大社と理解する方が自然だと思っています。なぜなら、

熊野大社の祭神は天的世界を故郷とする天つ神、出雲大社の祭神は地的世界を故郷とする

国つ神という別グループで、古代の神々構造の思潮を考えると熊野大社では『日本書紀』上の特記の意味価値をまったくなさないから

です。天つ神の宮の代表が伊勢神宮であるなら、ここは国つ神の代表である出雲大社を並べることで神々のコスモス形成がなされるというのが、当時の考え方だったと思われま

す。境内からはその時代の供膳土器も出土していません。以来、長い歴史時間に数限りない人々の次

## III 「御本殿」のつくりかた

御本殿大屋根の葺き替えのため檜皮を解体

して分ったことがありました。階段上の屋根の奥部では、前回の昭和遷宮以前の明治十四年の遷宮時の職人さんの仕事が残されています。昭和の職人さんは、実質、江戸時代に生きた職人さんの仕事振りの素晴らしさに触れ、自分たちを継ぐ後輩のために、あえて先人の技を残していたのです。これもつなぎで

す。材料の檜皮にしても簡単に手にはできません。原皮師という職人さんが、綱一本、小さな棒二本だけの道具で檜の高木にスルスルと登ってうまく皮を剥ぎます。綺麗に整えて修理現場に運ばれますが、その檜皮を打ち止めるのは竹釘で、これもまた様々な工程を経

ます。他方、夥しい量の檜皮を要しますので、次の遷宮の一助にと奉納下さった山に氏子の皆さんと一緒に一万本の檜を植林しました。ところが、次の遷宮には間に合わないことが分かりました。百年前後の成長木の皮を一端剥いだ後の再生皮から利用できるのとことでした。次の次の遷宮にやっとならぬ間に合う。しかも逐次の間引きもあり残るは二割弱、そうした長期間の山管理のお世話も必要です。こうした縦横の時間軸の様々な人々の心と技のつなぎで、今と未来がつながっていくのです。

## IV 病院再開発のつなぎ

檜皮古材は廃棄せずに様々な活用していますが、その一つに炭チップがあり、それを

つた当時島根大学附属病院長の小林先生から建設中のケア病棟に御本殿・天前社の檜皮炭をとの申し出がありました。大国主神様には医療医薬に関わる御神格が、天前社にも大火傷を負われた大国主神を治療看護された貝比売・蛤貝比売の神様がお祭りされています。先生は授業で「看護師の元祖」とお話をされている由。そうした由来の社殿の檜皮炭を新築ケア病棟に活用し、空調性能も高く評価されていますが、入院患者さんに対して由来のもたらす精神的ケアを含めて図ろうとされました。

## △ 神殿構造が語るつなぎ

お蔭で社会的貢献のつなぎも生まれました。平安時代のテキスト『口遊』(源為憲・九七〇年)に「雲太・和ニ・京三」と記されたように、古代の御本殿の高層性が発掘された御柱により証明されたことは、周知の通りです。

天つ神の要請により「国譲り」、地上の行政権を委譲された大国主神ですが、大国主神は神事を委ねられたわけ、逆に言えば「神譲り」を受けられたこととなります。御本殿内の御内殿の西向きも、ここに関わるだろうと。つまり、夜(神)時間世界の方向性です。

そこで「神譲り」された大国主神の神殿が天つ神側によって建築される訳ですが、その神話語りを現実に具象化することが要請されます。その語りの中で、ここで取り上げるのは神殿に敷設の「橋」です。高橋・浮橋と、そして特に「天安河」に架橋の「打橋」に注目します。

ハシを語幹とする語の多くはつなぐ・結ぶを原義とします。天安河とは、天的世界と地的世界の境の河で、ここに架橋するということは、両世界が決して断絶した世界ではなく常につながつている世界だという認識です。

これは、日本の神々世界の構造がピラミッド型の階級階層的構造ではなく、天つ神世界と国つ神世界それぞれが神々社会を同心円状にグループ形成し、両者が反価値対象として対立するのではなく常に往来する共存補完関係にあることを示唆しています。天安河架橋とあえて書いた意図意味です。そしてその打橋こそが、八雲の描かれた天井を唯一貫く心御柱に象徴的に表されている、と理解します。

## Ⅵ 相対性の通奏低音が生み、つなぐ心意

御本殿天井の八雲絵ですが、無限に湧き立つ雲を表意する「八雲」がそうあるためには八つの雲が必要ですが一雲不足。また一雲だけ方向が異なり、一雲だけ規模が大きいななど、何かしら完成・完全・統一・絶対などの雁字搦めの枠組みを忌避し、イナシ、スカシたよ

うに間を現出しているのが興味深いところで

そうした在り様は、一面、幼児画とも共通します。幼児画か何だと思われませんが、その発想が誤りです。私は遠近法画より、幼児の描く多視点画を心地よく素晴らしく感じます。一視点の遠近法画こそ進歩したものと思われがちですが、西欧世界でピカソ登場が衝撃を与えたのは、逆に感性の膠着化、退化の証明です。

多視点画の多角的感性は、対象に対して間をつくり、思考の幅を広げます。八雲画、多視点画からは、複相・多相の間合いのつなぎの対応こそ、大事な処方箋だと教えられます。日本人が本来的に有する思考方は、西欧的な「一元的な進歩発展史観、進化論」の思考方ではなく、「多元的な生成連鎖史観、深化論」と理解します。それは有限の連鎖をつなぎにつないで深めながら永遠性を求めるという思想で、遷宮という文化もこうした「通奏低音」の心意文化相の中で生成連鎖しています。

最後に、岡本太郎氏は御本殿を背後から仰ぎ見て何かを感じられ、著名な大阪万博のシンボル「太陽の塔」を制作されました。私たちも何かを感じ、未来に向けこうした思いをつないでいきたいと思います。



(文責 出川弓子A高校二十期)

